

母語者のコトとノの使い分け： モノとの関連も含めて

リグス 秀 美

要 旨

一般的に動詞を名詞化するとされるコトとノの文法指導は従来、二語が前接する命題と述語との関係で使用の可否が決まる、という「制限の視点」で説明されてきた。しかし、この方法では規則の暗記が必須となり修得に時間がかかる嫌いがある。そこで過程短縮を目指し、異視点からの新たな文法説明を試みた。データは広く日常言語活動の場から採取し、サイン・システム¹⁾の理念に基づく分析方法で行い、二語の関係は前方焦点 vs. 後方焦点という二項対立で表されるという結論に達した。更に、一文に両語が使われている例を“前後”に依って創りだされる焦点の集積という概念で説明している。

キーワード：形式名詞，前方焦点，後方焦点，焦点集積

1. はじめに

英語圏の初中級日本語教育現場で使われている教科書にはノが機能語として紹介されているのが一般的であり、普通、①名詞と名詞を繋ぐ助詞、②代名詞（準体助詞）、③動詞を名詞化する名詞化機能という三項目が導入されている。これらの用法の内③は英文法の動名詞に関連づけて説明している本も多く見られる（Simon 1986 他）。

一方、コトとモノに関しては機能語としてではなく文型が固定している「表現」として紹介され、典型的なものとして *Vta* コトガアルで「経験」、*V_{D.F.}* コトニスルで「決定」、*V_{D.F.}* モノダで「当然・常識」、*Vta* モノダで「回想」等が紹介される。

しかし英語で説明されている文法書ではノとコトは均しく英文法の不定形や動名詞に匹敵する名詞化語²⁾ (nominalizer) であると定義されているのが普通であ

る（例 Johnson 2008）。さらに理解を遅らせる要素として、三語とも名詞 / 代名詞 / 名詞化語としての用法がある上に“こと and の are sometimes interchangeable, but sometimes only one is applicable, making the rules quite complicated”（同上：250）と記述されているように互換的に使えるとあれば、学習者がその使い分けについて全く雲を掴むような感じを持つてしまうのは回避し難い。事実、この曖昧さは語選択の制限が後続動詞との組み合わせにある、と仮定していることに起因している、と指摘する文法書も少なくないのである（例：庵 et al. 2000, 森田 2007, Johnson 2008, 現代日本語文法⑥）。例えばコトしか使えない場合は後続の動詞が発話に関係する動詞の時（話す、伝える、約束する、命じる、祈る、希望する、聴く等）で、ノしか使えない場合は知覚動詞（見る、見える、聞える等）や、ある種の動作動詞（待つ、手伝う、じゃまする、写す等）、他に「止める」が後続の時、と説明されているが、この様な使える環境の仕分け分類の段階で終わるものは、煩雑感を生むだけで応用性は低いと考えられる。なぜなら、学習者がこれらのルールを丸暗記した後でなければ正しく使い分けられない、という事になるからである。ジョンソン（2007：19）も指摘する様に、ただ単にコトとノの置き換えの可否を分類しているだけではとうてい文法説明とは呼び難いと言えよう。

従来コトとモノはいずれも実質名詞から派生した抽象名詞であったものが、更に意味の漂白化（semantic bleaching）が進行して形式名詞としての用法が生まれた、と広く認識されている。ノに関しては同じ現象がノにも起きて名詞化語となったとする解釈と、準体助詞として分類する二種の見方で二分されている。前者が、助詞が文法化過程で活用語を名詞化する機能を得た、と解釈するのに対し、後者は形式名詞（準体助詞）が活用語連体形に付く、と視ている点が大きく異なる。実際には既に現代語では連体形を喪失している上、連体形概念が皆無の英語圏学習者にその概念を理解させる為には他の項目、例えばナ形容詞まで遡らなければならない為、名詞化語と教える方が遥かに効果的だと目されて来たのではなかろうか。

次に、コトとノの非互換性について述べてある説明を簡単に検討したい。

まず、森田（2007：253-254）は二語交換に随伴する内容の変化について『いいことだ』を『いいのだ』と換えると、『好ましい事態だ』の意味から、ただ、『いい』を強調する言い方に転じてしまう」と記しているが、ここで森田の言う『いい』を強調する言い方」という表現は「『いい』という価値判断＋断定」の図式を示していると思われる。換言すると、森田は「ノだ」形式では断定の「だ」が強調されていると考察しているのであろう。この観察は実に示唆に富んでいる。

同様の説明が『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（庵他 283）にも載っている。そこには「ノだ」を含む文が状況に対する話し手の解釈を表すこと、また、「ノだ」に後接するモダリティ形式が「ンだ」と「ンだろう」の二形式に限られ、はずだ、ようだ、らしいの推量表現は続かないことが述べてあり、モダリティとの関連性が明記されている。この記述に一筆加えさせて頂くと、私見ではダロウという表現は断定「だ」の推量形ながら、その推測的判断は話者の実体験から得た知識（empirical knowledge）に拠ることが多く、話者の心的態度は断定的であると考察できる（リグス 2007）。因って、「ノだ・ンだ・ンだろう」の三表現は共に前接部に置く断定性を増大させている表現と解釈する。

最後に、モダリティの視点から説明した記述の例を見てみよう。オンライン日本語チュートリアル・サイト（<http://www.jpfr.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/grammar/201112.html>）によると名詞化する為には「ノです・ノだ・ノである」と出来ないこと、また、その使用法は話し手の気持ちの表現（モダリティ）を表す時に限る、そうである。

ここに引用した文法書の説明を要約すれば、「命題+ノ+ダ」の形式にはモダリティが派生するが、「命題+コト+ダ」には話者の心的態度が反映されない、となる。その解釈が精確だとして、「名詞節化のコト」と「経験を表すコト」は同じなのか違うのか。また、何故「ノだ」という使い方に特別な意味があるのか。これらの疑問は学習者にとってコトやノそれ自体の意味機能が曖昧にしか理解できないのに随伴して、使い分け獲得は遥か彼方にあるゴールであろう。本稿の目的はこの長い道程を少しでも短縮できる「違う行き方」を提供することにある。コトとノを動詞の英文法の不定形や動名詞に関連させる方法ではなく、はたまた、国語学で用いられている準体助詞や形式名詞などの用語を使わずに、学習者にも馴染みの深い二進法で概念を使い分けの仕組みを説明することを目指している。

2. 先行研究

2.1. モダリティ的視点からの談話分析とその問題点

前項で「ノだ・ンだ・ンです」等により動詞節を名詞節に変換した時に話者の心的態度を表すモダリティ表現が随伴する為、単に名詞化目的の際は「コトだ」が義務的（obligatory）である、と学習者向けの説明に書かれている現状を見た。しかし、「コトだ」という表現にも「だ」に拠って示される断定性が含蓄されている。姫野（2003：37）によると、「談話におけるコトダは『したほうがいい』

や『したらどうか』等の相手に働きかける表現とは異なり、説明的・解説的で、話者の価値判断を示す意味機能がある上に、話者の真意は勧告・要求や強制までも含む表現である」のである。つまり、コト+断定の助動詞ダには認識的モダリティ (epistemic modality) と拘束義務モダリティ (deontic modality) の両領域に跨がる意味機能がある、というのである。この思惟の延長線上にある研究として吉田 (2006) を取り上げたい。吉田は分析を否定形述部文の場合に限定し、その種の発話には聞き手に対して行為の禁止を示す機能があること、聞き手はそれに従う義務を感じることを主張している (同上: 437)。そこでは、話者の語選択基準を聞き手の命題に対する認識度の高低に求め、話者の判断が正確なことが前提となっている。以下にこの仮説の根幹をなす三語の定義を抜粋した (同上: 438)。

“[T]he speaker’s choice of marking this nominalized clause with *no*, *mono*, *koto* functions to indicate the authoritative source or basis behind why the hearers is obligated to perform the action named by it, and in the following ways:

no: Marks the source of basis as assumed known or accessible to both the speaker and hearer (i.e. established in a past context, but recoverable through the present one)

mono: Marks the source of basis as having a validity which has endured throughout times; that is, it represents a generally accepted norm or truth-by-consensus, often based on common sense.

koto: Marks the source or basis as known or identifiable to the speaker (but not to the hearer) .

“The ability to cite this source or basis, in turn, serves to mark its user (i.e. the speaker) as standing in a position of higher authority than the hearer.

吉田は「～ない+ノ/モノ/コト」という三種の構文にはそれぞれの形式により、話者が送信する (encode) 三種類の強制力 (権威) があり、その信号は聞き手に受信される (decode) と主張するが、果たしてこの想定は多様な伝達設定・状況

に適応可能であろうか。この仮説では「話者には聞き手の認識度をその場で予測する能力が備わっている」と考えられている。直感的にはその作業の精密度は話者と聞き手の間柄に拠り大きく異なると思える。その点が言及されていないので強制度の判定に関しては疑問が残るが、それでも尚この仮説の特長は「話者が判断し語(form)を選択する」と考えている点にある。話者を言語伝達行為の中心に据える視点は、述語の種類に拠って語選択が制限(constraint)されるという膾炙された見方より何歩も先を行っている。しかし、残念ながらその弱点は「聞き手の認識度を話者が測れる³⁾」と仮定している点に在る。吉田の分析が一对一の談話行為に限定されている為、不特定多数の受取手に向けられた場合、という状況設定が視野から抜け落ちているのである。その為、分析結果に限りがあった。この問題点は広告文や商品に付された注意書きのような状況下で顕著になる。

- (1) 高压ガスを使用した製品であり、危険なため、下記の注意をまもること。①炎や火気の近くで使用しないこと。②火気を使用している室内で大量に使用しないこと。③高温にすると破裂の危険があるため、直射日光の当たると所やストーブ、ファンヒーターの近くなど温度が40度以上となる所に置かないこと。④火の中に入れないこと。⑤使い切って捨てること。(花王毛髪用スプレー)

大変興味深いことにこの抜粋部以外の「使い方」「ご注意」は、です・ます体で表記されている。ここに現れた「権威的表現」と「丁寧な表現」の混用は何を暗示するのであろうか。この点に関して詳細は3項現行リサーチで検討する事とする。

2.2. 意味的統語的機能に焦点を置く分析とその問題点

英語圏に於ける中上級日本語教育(三年生読解)の現場での必要性から考察されたノとコトの本質についての学習者向け文法説明を試みた研究を検討したい。

ジョンソン(2007)は現場に立つ一教師として「ノとコトが形式名詞として扱われること、二語の比較が避けられないこと、形式名詞の使用上の違いを学習者に理解させることが困難なこと」を述べ、これまでの研究とは異なった観点から考察した、学習者にとって困難とされるその使い分けをより理解しやすくする為に二語の意味的統語的機能に焦点を当てて考察を試みている。その動機も目標も本稿のものと酷似しているので、ここに紹介したい。

ジョンソン(同上:22)は、従来の主文に来る動詞によって二語選択を説明する方法が不十分であることを工藤(1985)の述語分類(taxonomy)を使い、分類

された動詞が意味上他の範疇にもまたがったりするため、実際の使用となると、この分類にも例外が多く生じることを指摘する。例として「感じる」が感覚動詞とも認知動詞ともなること、認知動詞として扱った場合は「こと」も可能になってしまうことを挙げ、更に、「判断が文脈に頼らざるを得ない部分が多く一例一例を検討していかなければならず、一般的な法則がなかなか見いだせない」という問題を提起している。その解決策として「『の』はそもそもそれ自体に何ら意味をもたず、動詞を名詞化する役割を果たすか、関係節に修飾される先行詞の代名詞としての役割を果たす、かいずれである。」とノに異なった二機能を想定している。また、動名詞化する用法で人間の五感や動きを表す動詞が主文に来る場合は、ノしか使えないが、それはコトが本来「事柄」を表すからであり、コトが「事柄」や「事実」という名詞を招く動詞の名詞化をする際の代名詞として機能すること、逆にノは具体的な内容を持たない為に「学ぶ」という動詞の目的語には成り得ず、「コロンブスがアメリカ大陸を発見した（事実／コト）を学んだ」という時はコトしか使えない、と結論づけている（同上：29-30）。

しかし、この統語的アプローチも、動詞分類アプローチの範囲を抜け出していず、学習者に使用可／不可の動詞の暗記を少なからず求めるものである。

3. 現行リサーチ

現行リサーチの分析的結論は本調査の為に収集したモノ・コト・ノの使用例から成るデータに拠る。それらは大きく分け、書籍・新聞等の印刷物、テレビの日本語放送と画面音声に付された字幕の文言の三種類である。分析は次の手順を踏んで行なった。

印刷物：

- 1) 三語とも名詞化語として使われているものを選んだ。因って「のです」とそのバリエーション（例「のであろう」や「のか」）も句末、文中、文末に関わらず、同様に扱った。
- 2) 文中の三語が現れている前後に注意を払い、命題部分が鍵括弧や“引用符号”に前接または後接している使用例に注目した。因って「名詞というモノ・コト・ノ」はその限りではない。
- 3) 各語がその文脈で具体的にどんな観念を表しているか（どんな物質・事態・状況・思惟など）を判断した。
- 4) 一文に二語あるいは三語が共起している使用例を吟味し、各部分によってどんな情報が伝達されているのか注意を払った。

テレビ放送：

- 5) 発話に付された字幕に周囲とはかけ離れて大きい文字や、その部分が目立つ色彩で彩られている使用例を収集した。
- 6) 発話（音声）と字幕との差が認められる使用例も収集した。
- 7) 各語が発話される直前直後に音韻の変調（音声の大小、高低など）が認められる例に注目した。

この方法で集めたデータの中に、ノが実質名詞の代理語として使われている事を証明する好例がニュース番組の中で見つかったので、紹介したい。

（2）画面に映っている話者が述べた意見（実際の発話）：景観も損なうし、眠っている方達がね、また、そういう赤穂浪士の方達だし、やっぱり建てるべきじゃないと思いますね。

字幕）：景観も損なうし、眠っているのが赤穂浪士だから建てるべきではない
（FCI モーニング・キャッチ 2014.11.26 放映）

この例は品川泉岳寺の隣に高層マンションが建設されている状況に対し、寺院側が施行禁止・中止の訴訟を起こした事件についての報道である。レポーターが住民に意見を求めている場面での回答である。インタビューを受けた人は赤穂浪士に敬意を持って「方達」という言葉を使用しているが、その発言を伝える字幕ではノに変えられている。これは字幕担当者がノを「方達」という敬語の代理語として理解している事を表している。先行研究の中でも度々ノが代名詞として使われる事が指摘されるが、（2）はそれを立証する格好な一例と言える。

では、次項で興味深い使用例を検討してみたい。

3.1. 出版物からのデータ

随筆、新聞などからコト・モノ・ノが形式名詞として使われている文章を抜粋し、それらの語がその文脈でどんな指示物を表しているかを判断した。以下はその要旨である。

使用頻度：

三語が使われている頻度はモノが一番少なく反対にノが最多でモノ<コト<ノの順に頻度が高く、その比率は本に拠って差があるものの、モノを1とした場合、コトはその数倍、ノはさらにコトの倍になるパターンが認められた。一例を挙げると、短編随筆集「老い力」ではモノ、コト、ノは夫々12件、34件、74件を数え、その比率は凡そ1対3対6となる。

この結果はノが様々な文章でモノやコトの代理語として機能している実態から見ても納得できるものであった。

指示物：

随筆本「上り坂下り坂」と「思考の整理学」の中で各語がその文脈で何を示しているのか調べてみた。この二冊を選んだのは作家の性別，生活環境，扱っている題材等の点で対照的であると考えたからである。結果，モノは実質名詞の物・者・人などを指す例が最も多く，コトは事態・所業・機会を表している場合が最多で，ノはこの両領域に跨がっている為に指示物は多岐に渡っていた。その内でも事態・所業・物・者・人・時・次第・訳・場所，等々である。簡単に纏めると，モノは実質名詞の使い方が已然色濃く，コトは「言葉」の系統と「事柄」の系統が文法化過程で合流したと見え，モノよりはその使用範囲がずっと広い。尚，ノはモノが短縮された形のものとして具体的な物質を指す場合にも，また，コトの代理として抽象的な概念を指す場合にも使われていた。これを簡単な表にまとめると以下の様になる。

表－１：二冊の比較（百分率の値は小数点二位で四捨五入したもの）

注：指示物に挙げてある項目は頻度高く代表的なものを選んだ

全件数	『思考の整理学』 外山滋彦		件数	『上り坂下り坂』 青木玉	
モノ 220	物・者・人・思考・訳	51.4% [113/220]	モノ 91	物・者	60.4% [55/91]
コト 504	事態・事柄・ 知的活動・所業	77.4% [390/504]	コト 103	事態・事柄・機会・所業	79.6% [82/103]
ノ 710	次第・訳・事態・ やり方・事柄・様子・ 知的活動・所業・物	84.8% [602/710]	ノ 200	次第・訳・事態・所業	69% [138/200]
1,434			394		

データ収集に使用した印刷物：「伊勢エビの丸かじり」東海林さだお，「老い力」佐藤愛子，「考えるヒント」小林秀雄，「きもの 365 日」群ようこ，「さくらえび」さくらももこ，「思考の整理学」外山滋比古，「日曜日の万年筆」池波正太郎，「日本語の作法」外山滋比古，「上り坂下り坂」青木玉，「またたび」さくらももこ，読売新聞 2013 年 12 月

鍵括弧や引用符号の使用と三語の接続関係を調べてみたが，鍵括弧に続く語は

コトばかりで、モノやノは見つからなかった。反対にノが鍵括弧を従えている例は『考えるヒント』の中で二例、その他にもこの使用法が認められたが、下に放送からの例も一緒に紹介する。

鍵括弧+コトの例：(文中の「こと」「の」はカタカナに変換して表示してある)

(3) 心を重くする影は、まだある。中国紙は月探査の狙いについて、「月の権益を守る」コトを挙げた。(読売新聞 2013.12.23)

(4) ニュース字幕：ストーカーによる被害者遺族や専門家達が立ち上げた研究会で“現在のストーカー対策は「被害者が逃げる」コトで解決はかろうとしていた”と指摘。

(FICI テレビ モーニングキャッチ 11.15.14)

ノ+鍵括弧の例：

(5) 駅のホームのアナウンスは昔から騒々しいことで親しまれているが、むやみと大声でわめくから、半分も聞き取れない。よく分かるノは「電車が来ます」くらい。(「日本語の作法」)

(6) 孫娘：よい家庭をつくるにはどうしたらいいの？

祖母：一番大切なノは「誠実さ」よ

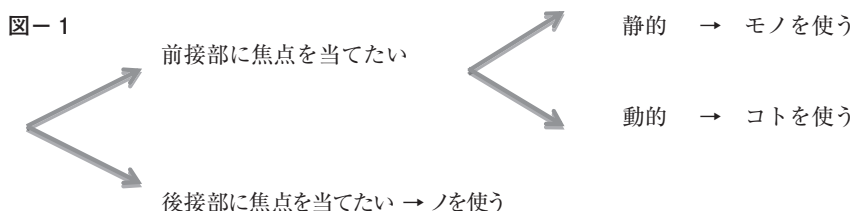
(NHK Number One on the Earth 11.5.14)

3.2. テレビ放送からのデータ

テレビ番組から多数の色付きフォントや特大色付きフォントの使用が既にテレビ放送業界での伝達テクニックとして安定している実情が判明した。民放局ばかりでなく NHK の娯楽番組 (例たためしてガッテン) では特大色付きフォントの使用は極普通に行なわれているし、朝や正午のニュースでは色付きフォントや色付き矢印が使われている。これらのテクニックがコトの前件 (コトを率いている命題部) に起こり易い兆候を見せているのと対照的にノが後接する部分が赤字や大きい字で表示している、という傾向が顕著に見られる、という使用パターン (language behavior) の補完関係が認められたのである。コトが前件に焦点を置き、逆にノが後件に焦点を置いているという解釈は、「はじめに」の項で言及した森田 (2007: 25) の“ノダはダを強調する”という観察を説明可能にしてくれる。ノが話者の「断定」に焦点を置く為、そこに話者の断定的心的態度が派生すると考える。蛇足ながら、文末に現れるノは多くの場合、「次第」とか「訳」とかの代理語として使われるのであるから、一般にンです文が説明を求める場面や、その返答の文に使われる事と調和する。

3.3. 提唱の文法モデル

上に述べた出版物データとテレビ放送データを分析した結論としてコトは前接する部分へ焦点を置きたい時に使われ易く、ノは逆に後接する部分へ焦点を置く時に使われている傾向が強い、という解釈を得た。モノとコトは有史以前から日本人の意識の中に存在する世界観を表している最も基本的な概念であり、モノは現実の物を表し、コトは言葉、事態、行為など物以外のものを表す語で、二語は補足関係にあると言われている。そうであれば、この関係は静と動の対比として表せるのではないだろうか。次の図－1は分析によって引き出された三語の意味機能をサイン・システムの理念に基づいて学習者にも分かり易い文法モデルとして表現したものである。



ノはコトで表される事態・行為といった動的な観念も、モノで表される物・情緒という静的な観念をも表す事があるので、語が前部に置く焦点度はコトやモノの場合より焦点度が分散して弱いと解釈できる。その結果、後接部に聞き手の注意が導かれ易いのであろう。従ってノを選ぶ状況は後接部に焦点を置きたい時に最適であると言える。

では、次の節でこのモデルの有効性を試してみたい。

3.4. 提唱モデル有効性のテスト

3.4.1. 前接部焦点のコト

コトが前接の命題に焦点を置く為に使われている事がテレビ画面の字幕の色遣い、フォントの大きさの差異が視覚を使って一瞬に識別できる例を検討していくが、紙面では色、活字のサイズに限りがあるので、例文中の色付き字は太文字と下線で、大フォントは太字と波線で、特大フォントは太字と二重下線で表す事とする。

(7) タオルなども個別のものをを使うコトが重要

(FCI 7.28.14 ヘルパンギーナ流行)

この字幕で伝えられる重要な、あるいは有効な情報が「タオルなども個別のものをを使う」という部分にあることは明白である。字幕の文言は実際に流れた音声よりも簡潔なものになっているのが普通であった。

(8) 積極的に触るコトが認知症にある効果を及ぼす (NHK 7.21.14)

この例文はアルツハイマー介護についての最新情報を伝える特集番組の中で見つかった字幕にあった文である。介護者が患者の体に直接「触る」という行為を取る事が大きな症状改善効果を持つ事を、最新の研究で判明した事を伝えているのである。

(9) 救急現場でもお金がないと分ればほったらかしにされるコトも

(FCI 7.25.14)

この字幕はラオスの小児医療の現状のモラルの低さを訴えている場面で見つかった。日本の状況とは異なるラオスの子供達を取りまく厳しい医療事情を伝えている。

(10) レポーター音声：エクストリーム出社の最も重要なルールは

画面字幕：遅刻をしないこと

(FCI 8.4.14 早朝出勤前にグループで遊ぶ大人達)

この字幕は出勤前に特定の場所に集合して、大の大人達が本気で「ごっこ遊び」をし、気分爽快になって出勤する、という大変ユニークなグループをについての報道の中で見つかった。画面には現れないレポーターの音声に続き、この二重下線の部分が赤枠白抜き超大字で示されていた。正に「超」大きい、サイズの字が画面にイタリックで書かれている。思いっきり発散させた後で、会社に向かう社会人として「遅刻をしない」のは最重要な鉄則と言える。そこに焦点を当てるのは当然とも言える。

(11) 「私どもの娘であったこと」に大変動揺し、言葉ありません

(FCI 8.12.14)

この例はダンボール箱死体遺棄事件の被害者の遺族コメントがナレーションと字幕で表されている。字幕に写された遺族のコメント文の中で鍵括弧が付された部分があった。これも目で見ても即座に「我が子」であった部分に焦点が置かれている事が明白となっている使用例と考える。

(12) トイズが宇都宮市に届けを出している保育士

⇒ほとんど勤務実態がないことが明らかに

(FCI 8.12.14)

この字幕には現地リポーターがマイクで話している画像と音声と同時に放映されていて、字幕赤字の部分をゆっくり明瞭に発音していることが聞き取れる例であった。このニュースは嘘で固めた申請で民間保育施設の許可をとったトイズという施設保育所で起きた乳幼児死亡事故を伝えており、経営者が始めから利用者を騙すという悪意を持っていたことが窺われる痕跡、また、それを調査していない行政側の杜撰さ、という二重の驚きの実態に焦点を当てる為に赤肉太矢印が使われた、と解釈できる。NHKの朝のニュースでも黄色や赤色で塗りつぶされた太い矢印をメッセージに冠する方法が頻繁に使われており、このテクニックは既に字幕作成の常套手段になっているようである。

(13) “目の前に助けられる人がある” というコトで (NHK 8.21.14)

この例は広島市で発生した土石流の救護の最中、遭難した幼い子供達を救助しようとして自らも土石流に飲み込まれて命を落とした殉職警官の尊い活動を同僚が偲んでカメラに向かって話している場面で映し出された字幕である。コトに前接する部分と引用符号が赤字で示されている。コトが前方に高い焦点度を置いている事が目で確認できる使用例と考える。

(14) 「けじめをつけたい」と会長辞任の意向を表明

⇒理事から慰留され会長を続けることに (FCI 9.2.14)

この字幕の文言は、元オリンピックのアイス・スケート選手でソチ・オリンピックの選手団団長を勤めていた橋本聖子氏が公の場で不適切な振る舞いをした問題で、本人が会長職を辞任すると表明したのに対して、理事側から慰留された事を告げるニュースの中で見つかった。橋本氏本人が「けじめ」をつける為に辞任する、という意向を示したにも関わらず、職務続行という次第になったことを、意外感を持って報道したと思われる。事実、字幕に現れた赤字部分は周囲の文字の二倍程の大きさであり、人目を惹くものであった。

(15) 北海道の航空会社 Air Do での不祥事についての報道

画面上の字幕：エア・ドゥの副操縦士 9月 機長への昇格訓練 スピード出すぎ・警報装置作動で着陸やり直し 教官として同乗の機長警報装置作動など会社に伝えず結果は良好と報告 再訓練を支持せず副操縦士は機長に昇格 社内チェックで不適切な操縦が発覚 会社幹部 再訓練を受けさせず放置 現在乗務外れる アナウンサーの声：教官として同乗していた機長は警報装置が作動したコトなど会社に伝えず、結果は良好だったと報告し、再訓練は指示しなかったというコトです。この副操縦士はその後機長に昇格しましたが、社内で飛行デー

タをチェックしたところ不適切な操縦が発覚したというコトです。しかし、会社の幹部も再訓練を受けさせないまま放置したというコトです。この機長は現在乗務を外れているというコトです。

(NHK 昼のニュース 12.18.14)

この例が珍しい使用例である事は、飛行機会社の杜撰な管理体制を伝えているアナウンサーの読み上げる文が揃ってコトです、コトです、コトですと五回も繰り返している点にある。

この使い方は普通ではない出来事、あつてはならない出来事が実際に起きた事を端的に羅列して、一種、リストアップの要領で非常識な五つの事実に焦点を当てた言い方、と考える。コトの前件焦点機能はこういう場合には、ブレット・リスト (bulleted list) を提示しているのと同様の効果が生じると思われる。

3.4.2. 後件焦点のノ

本稿の調査で見つかったノの使用例にはノの後にその文脈の中で新しい情報、または実質的な情報が続く発話が多かった。

- (16) アナウンサーの声：「長野県野沢温泉村で1メートル15センチなどとなっています」

次の画面では長野県飯山住人のコメント：「もうじき1メートルぐらいじゃないですか。これだけどっと降るノは、と、5～6年ぶりぐらいじゃないですかね」

(NHK News at Noon 12.13.14)

このNHKの昼のニュースで放映された長野県飯山地方に大雪が降ったことについて、ナレーターの声で「1メートル15センチ」と伝えてあるので、住人の男性が提供した「5～6年ぶり」という情報がこの場面での焦点であることは明らかだと言える。つまり、この男性は自分にインタビューしているレポーターに新情報に焦点を当てて発言したと考える。

では、次にノが後続する部分に焦点を当てている様子が画面で分る例を見てみよう。

- (17) 実はこの緑が使われるようになったノは急性緑内障が理由

(NHK ためしてガッテン 10.23.14)

ここでは急性緑内障という耳慣れない疾病について解説しているが、文中に「緑」という漢字が二度でてくる。緑内障という眼病に緑の字が使われている理由を説明しているのであるが、始めの「緑」はそもそも緑内障の緑を説明するのであるから、カラー・コーディネートでグリーンにしたのかもしれない。「急性

緑内障」の漢字は緑色の大きいフォントで書かれていて、そこに焦点が当てられている事を示していると考える。

- (18) タイ国法曹官談：(弁護士が) そのように説明したノは“代理出産”というよりも裁判所の認可を得やすいからでしょう (FCI 9.4.14)

この字幕はタイに渡航して現地の婦人に自分の子供を出産させた日本人男性の奇怪な事件を報道するニュースで見つかった。字幕はタイ家庭裁判所の所長のインタビューでの発言の日本語訳で、ノに後接する部分の代理出産というこのニュースでのキーワードが引用符号でハイライトされているのが明確になっている。

- (19) 体への負担が大きい日本への長旅 それを選んだノには小児医療を巡る“埋め難い差”

この文はラオスから腎臓癌で余命少ない赤ん坊を連れて、日本の医療技術の高さを頼って遠路はるばる病気の赤子を連れて長旅を決意した背景を説明している。ノの後続部にグリーン色で書かれた小児医療というキーワードが見える。その部分に続く語は赤字と引用符号の二重の強調が施されている。

- (20) 複雑なものができるノがナノドッツの魅力の一つです (FCI 7.30.14)

- (21) 続いてくるノは台風 11 号 (FCI 8.4.14)

- (22) 昔はあの～、動かさない、じっと安静っていうのが主流だったと思うんですね。痛みのコントロールが治療のプロセスの中で大きな影響を与えるというノは [意外な]、もちろん学校でもそれはあまり習ってなかった。(ベテラン病院長)

この例文は音声強調によって後件命題部分に焦点が当てられている、と判断したケースである。この発言はベテラン医師である熊本済生会病院長が最新医療に於けるペイン・コントロールと治療について語っている場面で現れた。このベテラン老医師にとって、この最先端の医療技術は意外である、と言っている。この例文中「イガイナ」に置かれた音声的強調をブラケット符号で表した。

- (23) 次に目指すノは一 (FCI 7.30.14)

次は優勝

相撲力士豪栄道関の優勝インタビューにおける発言を字幕化したもの

- (24) 木屋旅館さんみたいに観光客に PR できて商品が出せるノは大変心強い (NHK ウチの町の外国人 7.19.14)

この例もノに続く部分が青色の字で書かれている字幕で、表記上の都合で下線が引いてある部分はテレビ画面では飛び抜けて大きい紫色の文字で表記されている

て他の部分から目立つ文言となっていた。

(25) 覚えるノが異常に早くなった (NHK ためしてガッテン 10.1.13)

(26) 蒲団をかぶって寝返りをうつノも痛い
(NHK ためしてガッテン 12.17.14)

3.4.3. 焦点の集積

ノとコトで挟まれている部分が鍵括弧によって焦点が置かれている使用例を見てみよう。

(27) ゴジラが象徴しているノは「自然の脅威は誰にも止められない」コト
(NHK 7.22.14)

ノは後続部分、自然の脅威は誰にも止められない、に焦点を置くし、コトは前接している部分、自然の脅威は誰にも止められない、に焦点を置く。よって、その二語に挟まれている部分に焦点が重複していると解釈できる。ゆえに、和訳された字幕でその最も肝心な部分が鍵括弧で示されていることは、本稿の要点と一貫していると言えよう。

(28) 明日お迎えが来ても大丈夫よ。私にとって大切なノはひとりではない
コトよ。
(NHK Number One on the Earth 11.5.14)

イタリア語での発話の和訳字幕)

この発話は 107 歳の老婦人が自分の誕生日パーティーで取材に来た NHK 番組制作スタッフに向かって話した言葉の和訳である。9 人の兄弟姉妹, 13 人の子供, 58 人の孫, 12 人のひ孫, 4 人の玄孫に囲まれ生活できる幸せを語っている。「自分は孤独ではない」という想いに焦点が置かれている、と解釈できる。

(29) インタビューアー (字幕): いつからここに花を
(聞かれた土地の人の話の翻訳字幕): ベティ! いつからはじめたんだ
っけ? この場所。

ベティ (翻訳字幕): ずっと前からやってるわよ。公園の美化活動が始
まったノは 2001 年か 2002 年ね。(NHK Somewhere on the Street 11. 29.14)

日本から訪ねて行ったインタビューアーの質問は「いつ?」と花を植え始めた時期を聞いているのであるから、Grice's Maxim (詳しくは Levinson 1983 Pragmatics を参照) の法則によれば、ベティさんは「いつ」に対する答えをた正しく伝えなければならない。換言すれば、“around 2000 and 1 or 2” という部分に最も重要な情報が伝えられているのである。

(30) (和訳字幕) おいしいコーヒーを作る秘密なんて無いよ。

コナ・コーヒーには 200 年の歴史がある。200 年も守れるひみつなんてないさ。私に言えるノはただ時間をかけてひとつずつ丁寧に作業をすすめるコト (NHK 世界ふれあい街歩き 12/6/14)

この話者は日系三世アメリカ人でハワイコナ島で、祖父の代からコーヒー栽培を営んでいる老人である。発話は英語で次のようであった。Secret of making a good coffee is impossible. We have been in for two hundred years, Kona coffee. There is no secret. You cannot hold a secret for 200 years. So, only thing I know of is basically to take your time and do your job one-step at a time.

この英文からも分る様に、話し手が最も伝えたかった事は、字幕でノとコトに挟まれた部分、「私に言えるノはただ時間をかけて ひとつずつ丁寧に作業をすすめるコト」であろう。この字幕作成者はノの後件焦点とコトの前件焦点を巧く使い分けて、このメッセージを翻訳したと考えられる。

(31) 一番大切なノは人に貢献するというコト (FCI 12.7.14)

この発話はノーベル賞授賞式に臨む天野氏が英語でスピーチを行なった時の和訳字幕であるが、実際の発話は「The most important thing is to contribute to the people」という文である。この短文は the most important thing とその内容である to contribute to the people という二つの部分で構成されているが、どちらの部分に大事な情報が込められているか。その答えは明白である。この字幕の作成者も又、ノの「大事な点が直ぐに続くよ」という信号とコトの「今、言った点が大事だよ」という信号を駆使して、この話者の生きる上での信条を書き表したのだと考えられる。

4. まとめ

英語圏での日本語教育の現場ではモノ、コト、ノの三語は一つのシステムと導入されているのではなく、普通はノが動詞と動詞節を名詞節に変換する機能語として紹介される。次にコトは「動詞過去形+コトがある」という構文で経験を表す表現として紹介される。後に「動詞現在形+コトにする」という構文で決意の表現として紹介される。そしてモノは「動詞過去形+モノだ」という構文で回想を表現し、話者の感傷的な情意が含まれている表現とも教えられる。更に、「動詞現在形+モノだ」で世間一般の常識を聞き手に教唆する表現とも説明される。

要するに、これらの語は一見何も関連がないバラバラの表現として教えているのが、恐らく一般的な授業であると思われる。

しかし、今回の調査を進めていく中で、従来の日本語学で説かれる様に三語とも形式名詞として使われている場合がその使用例の大半を占めている実態が徐々に明らかになった。

ノが代理語である事を明確に証明した例文2の中で実質名詞「眠っている方々」から代理語「眠っているの」への置き換えがなされた事実により、準体助詞を肯定する研究者達の観察の正当性を支持する結果となった。発話では「眠っている方々」と発音されているにも関わらず、その発言内容を字幕にする作業の際には「眠っているノ」と変えられていた事実は「ノの指示物が文脈から判断できる場合が多い」という観察より、ノが代理語である語であることを能弁に語っている。事実、この場面を録画したものを実際に授業（日本語三年生）で見せたところ、学生達はノは代理語（proxy）と即座に理解した。

出版物の調査を通して、ノがモノの代理としても、またコトの代理としても使われていた事が明確になったことで、本稿ではノが前件へ置く焦点がモノやコトより低い、とし、随伴的にノが後件に焦点を置く、という結論に辿りついたのである。現代日本語の話者達が文章内のどの部分に焦点を置くか、という談話構成上の意図によってコトかノのいずれかを選べるシステムを創り上げたと考察するものである。

注：

- 1) 信号 言語をサイン・システムの一つと看做した言語学的理論では、発せられた言葉は発信側と受信側の両方が解するサインを伝達するとされる。例えば、赤信号では止まるし、青信号では進行する、という交通規則は信号サインの設置者側と通行人の双方が色の示す意味を理解している、という前提に基づいて成り立つ。言語伝達も発信者と受信者の双方がその語の持つ意味を、発せられたサインとして解読できる能力を持っているのを前提としている。この能力を言語能力（competence）と呼ぶ。
- 2) ノは正確には語ではないが、本稿では便宜上名詞化語と表記している。
- 3) 話者の判断 Riggs (2006) は Talmy Givon (1982) “Evidentiality and Epistemic Space” に提示された Lowest, Medium, and Highest Certainty から成る分析基準である、話者が聞き手の既得認識度を測定出来るという想定に含まれる論理的矛盾点を証明している。

参考文献

- 庵功雄他（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄他（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 尾方理恵（2003）『形式名詞がこれでわかる』吉川武時編 [9-29] 東京ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法⑥第11部複文』東京くろしお出版
- ジョンソン由紀（2007）『言語学と日本語教育Ⅴ』南雅彦編 [19-33] 東京くろしお出版
- 坪本篤朗（1998）『日英語比較選書③：モダリティと発話行為』[155-166] 東京研究社出版
- 姫野昌子（2003）『形式名詞がこれでわかる』吉川武時編 [35-45] 東京ひつじ書房
- 森田良行（2007）『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版
- 吉川武時編（2003）『形式名詞がこれでわかる』
- リグス秀美（2007）『言語学と日本語教育Ⅴ』南雅彦編 [35-51] 東京くろしお出版
- Jonson, Yuki (2008) *Fundamentals of Japanese Grammar: Comprehensive acquisition* University of Hawai'i Press
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Languages* Massachusetts: The MIT Press
- Levinson, Stephen (1983) *Pragmatics*, Cambridge: Cambridge University Press
- Riggs, S. Hidemi (2006) "The Structure of the Japanese Inferential system: A functional analysis of daroo, rashii, soo-da, and Yooda" in *Advances in Functional Linguistics: Columbia School beyond its origins* [239-262] Joseph Davis, Radmila Gorup and Nancy Stern (eds)
- Simon, E. Mutsuko (1986) *Supplementary Grammar Notes to An Introduction to Modern Japanese Part I*, Ann Arbor: Center for Japanese Studies at the University of Michigan
- Yoshida, Nina (2006) "An Analysis of Negative Nominalized Predicates as Prohibitives in Japanese Discourse in Japanese" in *Korean Linguistics* [435-446]
- オンライン・リソース 『日本語教育通信』Japan Foundation 国際交流基金 <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/grammar/201112.html>

(Hidemi RIGGS, カリフォルニア大学アーバイン校主任講師)